九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

19世紀アメリカにおける女による〈母〉礼讃言説と〈教育〉：リディア・ハントリー・シガニー『母への手紙』(1834)をめぐって

野々村，淑子
九州大学大学院人間環境学研究院教育社会計画学講座 ： 講師 ： 教育文化史

https://doi.org/10.15017/953

出版情報：大学院教育学研究紀要. 1, pp.135-157, 1999-03-31. Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，1998，創刊号(通巻第44集)，135－157
Res. Bull. Education., Kyushu U., 1998, Vol.1, 135－157

19世紀アメリカにおける女による＜母＞礼讃言説と＜教育＞

――リディア・ハントリー・シガニー『母への手紙』(1834) をめぐって――

野々村　淑　子

構　　成

Ⅰ．＜母＞と近代―「はじめに」に代えて―
　1．＜母＞という問題領域
　2．＜母＞の表現主体としての女性
Ⅱ．19世紀アメリカの文芸活動とリディア・ハントリー・シガニー『母への手紙』
　1．＜母＞礼讃言説を「書くこと」,「読むこと」と女性
　2．リディア・ハントリー・シガニー：「幸福な家庭生活」の創作とその大量複製
　3．『母への手紙』：書誌と構成
Ⅲ．「幸福な母」：『母への手紙』の読者への配慮と修辞法(レトリック)
　1．「母の特権」と「母の愛」の非自明性
　　(1)「母の幸福」のイメージ
　　(2)「母の特権」とその「有益性」
　　(3)「母の愛」についての特論
　2．「教育」をめぐる「母」の義務とパラドックス
　　(1)「母」による「教育」なるもの
　　(2)「息子」と「娘」の「教育」をめぐる「母」の循環論法
　3．「母」役割をめぐる不安・不満から快楽への転化：共感の提示と欲望の喚起
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．＜母＞と近代

1．＜母＞という問題領域

母とはいかなる存在なのか。どのような「制度」として存在するのか。女性学は，葛藤を抱えながらも，最も切実にこの問いに答えようとしてきた。それは，「母性」こそに女性の特質性をみようとする「母性主義」と，「母性」への束縛こそが女性の自立を妨げているとした「反母性主義」に大別される。それぞれの立場からのアプローチの成果もさることながら，その論争の展開そのものが女性

学（女性論，あるいはフェミニズム思想）の歴史であるといえるほど，母とは重要な鍵概念である。フェミニズムと「母性」というと，「母性はいかに女性の生き方に制限を加えてきたか」を告発する「反母性主義」がとかく注目されがちである。しかし，そこにこそ女性のよってたつ基盤を見つけるべく，あるいは「近代」が抑圧してきた価値に光をあてるべく，「母性」に接近した議論も存在する[1]。

このような女性問題からの関心と並行して，「近代家族」のなかで営まれた親子関係や性別による領域区分を明らかにする過程で「母」の問題にアプローチした研究がなされてきた。それらは，主として家族の形態に注目し，「全き家」から「近代家族」へ，という以下のような図式を提示する。家父長制の下で生産生活と消費生活を含みこんで営まれてきた「全き家」から，近代化と共に経営体としての機能が剥奪され，使用人や親類縁者，近隣の人々との関係の絆が切断されていく。その後に残されたのは情緒性と消費生活のみをその営みとする夫婦・親子の関係であった。これが「近代家族」のモデル像である。経営的機能の外化，すなわち職場と居住の場の分離によって，「父」が外で生産労働に勤しむようになると，「家庭」は女，子ども中心の世界と化していく。それと共に女性は，「母」・「主婦」として「家庭」の中核的存在となることを期待されるようになる，というものである[2]。

近年は，こうした家族史研究の方向に加えて，むしろ家族は近代社会や近代国家の規範醸成の中心的拠点であった，換言すれば，「生（生命，生活）」の領域に関わって近代人を養成してきた最も効果的装置であった，とする研究が注目されつつある。それらは，「母親」としての女性の「権利の主張」や「地位向上（の要求）」こそが，彼女の子供や夫の健康や道徳の管理を通じて人々を監視し，管理する巧妙な道具となっていると指摘した。女性は，自ら主体的に「母」として自己形成し，まさにそのことによって，近代人が養成され，近代社会が維持されてきたという仕掛（からくり）である[3]。

ここに至って，＜女性＞（あるいは＜母＞）[4]がいかに表象されてきたのか，だけではなく，女性がそれをいかに表象してきたのか，つまりいかに主体的に自らのイメージをつくりあげてきたのか，ということが問われ始めた。その根底には，近代人の主体＝服従（subject）化の構造（し）と機能（くみ）を明らかにしようとする課題が横たわっている[5]。

翻ってみれば，近代人の養成というテーマは教育学がその根本としてきた問題であることはいうまでもない。従って，教育学（史）研究にとって，これらのアプローチはかなりのインパクトをもった。そして，教育史研究においては，これらの研究を踏まえ，学校教育中心史観からの脱却という意味での家族への接近ではなく，近代教育を可能ならしめた家族のあり方や親子関係の解明を主眼とした，より根底を問う研究がなされつつある[6]。

2．＜母＞の表現主体としての女性

しかしながら，こうした近代社会史的研究とは別箇に，あるいはそれと対話しながらも独自の領域として，表現主体としての女性に注目し，その深層に迫り大きな成果を生み出してきたのが，文芸批評の分野である。それまでの文学史に名を綴られることのなかった女性作家に光をあてる，という意味でのフェミニズム文学史研究である。そこでは，女性の作品に文学的価値を付与するのではなく，その表現，言説をめぐって展開される＜女性＞の世界，その＜男性＞との差異や関係性，あるいは

＜母＞や＜父＞，＜子ども＞との関係性を明らかにすることがめざされてきた。すなわち，ただその言説を書いたのが女性であるか男性であるか，ということだけではなく，その言説の内部に書き込まれた性差が問題とされるのである(7)。女性と表現についての，示唆的な文章を引用してみよう。

> 性差の制度（システム）と思考（ディスコース）からの解放を求めた女性は，自らの内面が性と家族の支配する文化の深層に深く捉えられている事実に直面しなければならなかったが，それを表現すべき言語そのものが＜書き言葉＞という性差の文化の産物であることにも気づかずをえなかった。女性は男性文化としての言語から疎外されてきたのであり，自らの内面をそれによっては表現できないという発見であった。女性は，そもそも言葉による表現を問い直さねばならなかったのである(8)。

かくして，女性の自己表現は，＜沈黙＞あるいは＜狂気＞の領域へと模索が続けられるのだ。

では，女性は＜母＞をいかに表象してきたのか。＜母＞は近代の女性にとって幾重にも圧し掛かる呪縛であり，にもかかわらず否定しきれない憧憬でもあった。それゆえに，冒頭に記したように，女性思想においてもゆれが消え去らないのである。

> …女性は，（性差による；引用者による補足）二元的文化のディスコースの隙間を通り，それを利用してサーバイバルを図ってきたのである。
>
> 女性のサーバイバルの試みは，結果的に制度を維持することになる保守的なものであることが多かった。そのような女性のあり方を，現代のフェミニズム批評は，社会的に男性―父親を代行する＜男根をもつ女性＞として位置づけ，批判している。しかし女性は，後述するように，二元的文化の中でその位置を容認された＜女性文化＞を安全弁としても生き延びてきた。男たちと同様に，女たちにとっても，性差の文化が性的他者との対立を回避し，性的存在としての女であることからの避難場所として必要であったことは確かなのである(9)。

先の引用が現代女性についてであったのとは違い，これは近代以前の女性表現についての分析である。＜母＞の表象は，両者にわたりアポリア（難題）として存在しているのである。つまり，近代以前の女性は，男性ディスコースの内部で制度維持に加担しながらも，そこでの延命術として＜母＞を表現した。現代女性は，それとは逆向きに，男性ディスコースからの逸脱，脱却を図った末の＜狂気＞，つまり自己分裂や自己破壊からの「救済」として，あるいは＜狂気＞をそのまま呑み込むような「闇」として，女性は＜母＞を表現する(10)。このような時代区分の境界線を引くことができるか，という大きな問題はとりあえず先送りにして，ここで押さえておきたいことはこうである。女性が＜母＞を書くことは，さらに＜母＞を希求する言説を書くことは，男性の描く表象にからめとられた，としてのみ把握することはできない。そこには，自らが生き延びていくための「避難」「サーバイバル」，あるいは「救済」といったものが混在している。それはいかなるものだったのか。そしてそのことによって，＜母＞はいかなる問題を抱え込まされたのか。＜母＞とは，独立した概念ではない。＜子ども＞に対する関係概念である。ゆえに，＜母＞が抱え込まされたものは，＜子ども＞との関係において発現する。従って，すぐれて＜教育＞の問題なのである。

本稿は，女性向けの「家庭に関する書物（や雑誌類）」が氾濫し，『母の帝国』(11)とまで称されるほ

ど母役割礼讃言説が顕在化した19世紀前半期アメリカで，人気女性作家によって書かれ多くの人に読まれた育児書に注目する。その言説分析を通して，＜母＞が女性によってどのように表現されたのか，女性はどのように＜母＞としての自らのイメージをつくりだしたのか，そしてそれは，いかなる＜教育＞を想定し，＜母＞をその仕事に勤しむように説いたのか，を明らかにすることを課題とする。

Ⅱ．19世紀アメリカの女性の文芸活動とリディア・ハントリー・シガニー『母への手紙』

1．＜母＞礼讃言説を「書くこと」，「読むこと」と女性

19世紀南北戦争前のアメリカは，都市化・産業化とともに＜中産階級＞が（実態としてではなくモデルとして，すなわち可能体，理想型として）成立しつつある変動期であった[12]。＜近代家族＞は，この＜中産階級＞の指標として成立するのである。その理想像においては，＜女性＞は，＜母＞として，＜子ども＞に愛情を注ぎ，＜家族＞の健康と道徳に配慮する。上記（Ⅰ章1節）で整理した＜母＞の像である。

そしてまた，興味深いことに，この時期はこうした＜中産階級＞（志向）の女性向け（あるいは子供向け）のジャーナリズムが勃興した時代であった。産業史的にみれば，それまで英仏からの輸入を主としていた出版業が，それを支える著者・編集者・書籍業者も含めて「アメリカ化」していく進行期であった。しかしそればかりではなく，ジャーナリズムが特に女性向けに確立したことは，＜中産階級＞としての＜近代家族＞像，およびそこで展開されるはずの「愛による教育」の成立と密接に結びついていたといわれてきた。

すなわち，「読書に没頭」することのできるのも，＜母＞の使命に没頭することも，＜中産階級＞という特定の社会組織を構成する場において，その習慣と関心を集約させるべく形成された「共働関係」にあるという図式である。換言すればこのようになる。「読書」「育児」「家族の健康管理」は，＜中産階級＞の女性にのみ許された「特権」である。この時期に氾濫した「家庭に関する書物」は，良き＜母＞のための心得や＜幸福な家庭＞の物語といった内容を織り込み，人気を博した。それらの言説は＜中産階級＞女性のステータスシンボルを生産し続け，またそれを「読むこと」自体，そのぶん閑暇を享受できるという意味でステータスシンボルでもあった。そしてそのことによって「愛による教育」が可能となり，「愛によって子どもの心の中に親の権威を確立し，自己統治する人間をつくりだした」[13]。

まさに本稿で分析するシガニー『母への手紙』は，この戦略を「完全に把握」する典型であるといわれる。しかしながら，その言説を丁寧に読み解くと，このように明言することはできないのである。というのは，「読書行為」と「愛による教育」の「共働関係」にしても，あるいはそもそも，それぞれに「没頭」することの階級的・性（差）的「特権」にしても，この『母への手紙』の言説においては，自明かつ透明で整合的なものではないからである。むしろ，逆に，この不整合を修正し，それがあたかも透明性をもつかのように策した修辞（レトリック）がちりばめられている。

この修辞（レトリック）は，とりわけて女性による言説に特徴的なものである[14]。この時期，多くの女性が「読むこと」と共に，「書くこと」に進出し始めていた。女性作家がそろそろ市民権を得ようとしていたの

である。しかし，上記（Ⅰ章2節）で触れたような「書き言葉は男性のもの」という意識はまだ残存していた。『母への手紙』の著者シガニーの夫も彼女の執筆活動に難色を示したが，それもそうした意識の現われである。それでも彼女たちが「書くこと」に傾倒したのは，大方の場合，金稼ぎのためであった。つまり，「書くこと」と「読むこと」のあいだには，階層的・意識的ずれがあるのだ。このずれもまた，この両者のあいだに介在した言説に微妙な修辞（レトリック）を生み出す。これらの修辞（レトリック）が，女性による女性向けの良き＜母＞となるべきあれこれを啓蒙する言説という，言説生産の関係（書き手と読み手の関係）によりつくりだされ，また，その修辞（レトリック）がその関係をより強固にするという，共犯関係にある。ありていに言えば，女性は稼ぐために（読む女性が満足するように，女性が読むべきとされた内容を）書く。それを読んだ女性が，良き＜母＞となるという困難に際する葛藤を緩和し，安心して読み進めてくれることを期待しながら書くのである。このような構造（し）と機能（く み）をもった修辞（レトリック）とは，どのようなものだったのか。

結論を先取りしていうと，『母への手紙』は徹頭徹尾「母の幸福」と「母の特権」を高らかにうたいあげつつ，女性たちの拒否感，不安や不満などを吸い上げて，その欲望を「特権」の獲得に転化する修辞（レトリック）の集積である。その説得の語りの過程でつくりあげられていく「教育」の像は，「愛による教育」の充足感ではなく，堂々巡りの議論とそれを覆い隠す美しい修辞（レトリック）に塗り固められたものなのである。

2．リディア・ハントリー・シガニー：「幸福な家庭生活」の創作とその大量複製

リディア・ハントリー・シガニー（Sigourney, Lydia Howard Huntley, 1791～1865）は，「『ハートフォードの歌鳥（the sweet singer of Hartford）』ともてはやされ，文壇のみならず政界にまで影響力をもった」[15]，当時は高名な詩人，作家である。当時創刊ラッシュであった女性雑誌や年鑑などへの寄稿者として，その人気をかわれて多額の報酬を手にした[16]。文学的な評価は低く，粗雑な「引用」などをめぐる「非難」を浴びることもあったが，雑誌掲載分の詩や小説などを本にして出版し，どれも売れ行き好調であった。その著名ぶりは大変なもので，渡米した英国の有識人たちがわざわざ彼女の住むハートフォードに立ち寄るほどだった。自らも渡英し，彼らと親交を結んだ[17]。

しかし，こうした「成功」は，ただ彼女がその居間で書いたものに人気がついてきたというわけではなかった。雑誌の編集長に掲載を打診する手紙を書いたり，政界，経済界の有力者の記念日を手紙などからすべてピックアップしたカレンダーをつくり，その日に自分の本を贈るなど，自ら精力的に「宣伝」活動を行っていた。夫はそうした彼女の姿に憤り，「あばずれ女」よばわりするのである。

> 女性は，雲に隠れた太陽のようであるべきだ。そして周りのもの皆に，生命と温かさと安らぎを与えるのだ。…いったい誰が，自分の妻に社会全体の公的所有物（公娼）になってほしいと思うだろうか[18]。

彼女の「成功物語」は，いわば絵に描いたようなものであった。父方の祖父はスコットランドからの移民であり，父はハートフォードの名家ラスロップ家の庭師であった。元々はその家の主人（エール大学卒の医者）の雑務係として雇われたのであるが，彼の死後，夫人が庭師としてとどめた。子ども3人に先立たれたラスロップ老夫人は，庭師の娘リディアを居間に呼び入れ，さまざまなことを語っ

てきかせた。リディアの「詩ごころ」は，彼女によってつくられたといわれている。老婦人の死後，ハントリー一家はラスロップ家を離れたが，以後，両親を援助するというのが彼女の使命となった。20歳のとき，近隣の名士の援助で友人と女子教育のための学校をつくり，教師としても，また教科書作家としても「成功」した。当時の女性がある程度の体面を保ちつつお金を稼ぐには，女学校教師という職業は（「家庭小説」作家と同様に）最適だったのである。しかし，28歳のとき，古典語の勉強会で知り合った，3人の子どもがいるやもめ暮らしの43歳のチャールズ・シガニーとの結婚を決意する。彼は，ボストンの商人の息子として生まれ，13歳まで学校に通ったのち徒弟に入り，その後ハートフォードで事業を起こした企業家である。「ロマンチックな恋人とはいえず，少々神経質でペダンティック」な面はあったが，「皆に尊敬を受けるような人格者」[19]であった。そして，誰もがその結婚は，リディアにとって幸運で幸福なものであると信じた。彼女は，階層社会の中での人生の階段をその結婚によって昇ったのである。そして，結婚と同時に教師を辞めた。しかしながら，先に見たように，夫チャールズの妻として「幸せな家庭」の天使たる母の座におさまることはできなかった。1824年（33歳），ハートフォードの町のある行事に詩を献上したのをきっかけに，再び執筆活動を始め，その後の活躍ぶりは先述の通りである。夫はそれに理解を示そうとはせず，先妻の子どもとの間の溝は深く，その上自分の息子は彼女の献身にもかかわらず荒れて，夭逝した。また，チャールズの事業が上手くいかず，その収入では「幸せな家庭」を演じきることが出来なかったことも，彼女を金稼ぎに執着させたともいわれている。つまり彼女が書き続けた「幸せな家庭」と「幸せな母」を，彼女自身は現実には経験しなかった[20]。

それをもって，彼女がアグレッシブに文芸活動に精を出したのは，そうした自己分裂を「書くこと」で「昇華」しようとしたのだ，という解釈も成り立つであろう[21]。確かなのは，実際生活はどうであったにせよ，彼女が「幸せな家庭生活」を送っているというような，書簡類などを整理した後の伝記作家によれば偽りであるような，「個人的なことを，世間（あるいは，読者 her public）に対して出し続けたのであり，世間（a public）のほうは，彼女と同じように愛国心をもち，ロマンティックで敬虔なレディたちをつくりあげた[22]」ということである。

本稿では彼女の書いたものの意義や価値について云々することはしない。多くの女性読者を魅了した言葉の魔術師が残した母親向けの育児書は，それだけに当時の普通の人々が理想とした＜育児＞，＜教育＞の姿を如実に語っているであろう。あるいは，その理想を創造し固定化していく巧みな装置であったともいえる。この理想は，その像に向かって人々のエネルギーが注がれていく人気映画の映像のようなものである。その映像を競って求め，とりこみながら，その姿に自らを徐々に近づけていく。手の届きそうな映像であり，逆にそれが人々の現実をつくりだしもするのである。

3．『母への手紙』：書誌と構成

『母への手紙』は，1838年に刊行された後，6版を重ねた[23]。それゆえに，その人気と影響力の大きさから，当時の育児書の代表的な一冊に数えられてきた[24]。しかしながら，育児（書）などの歴史研究者たちの思惑とは異なり，シガニーは「ハートフォードの歌鳥」というニックネームにも表われているように，詩人としてのほうが著名であるし，自己認識としてもあまりこの書物はさほど重要で

はなかったようである[25]。だからといってこの書物が分析に値しないということではない。著者の思い入れがさほどないだけに，より売れることをねらった（つまり読者にすりよった）内容であり，シガニーの個性ではなく，より当時の多くの人々の意識を物語る言説であるといえるからである。

以下が全体の構成である。一通ずつの手紙を積み重ねたその形式にも表われているように，その文体は，論理的・分析的であるとはいえず，書簡体で印象的である。想起したままに古今の著名な言葉をちりばめ，挿話をはさみ，わかりやすく，また感情移入させるような美しい表現がそれに彩りを添えている。ゆえに一応章だてしてあるような構成になってはいるが，各章に書かれた内容に重なる部分も多い。

序（PREFACE）		7頁
第一信（LETTER Ⅰ）	母の特権（PRIVILEGES OF THE MOTHER）	9頁
第二信（LETTER Ⅱ）	子どもの両親への影響	
	（INFLUENCE OF CHILDREN UPON PARENTS）	19頁
第三信（LETTER Ⅲ）	幼児期（INFANCY）	27頁
第四信（LETTER Ⅳ）	最初の授業（FIRST LESSONS）	35頁
第五信（LETTER Ⅴ）	母の愛（MATERNAL LOVE）	47頁
第六信（LETTER Ⅵ）	習慣（HABIT）	56頁
第七信（LETTER Ⅶ）	健康(HEALTH)	69頁
第八信（LETTER Ⅷ）	経済（ECONOMY）	80頁
第九信（LETTER Ⅸ）	早期教育（EARLY CULTURE）	89頁
第十信（LETTER Ⅹ）	家庭教育（DOMESTIC EDUCATION）	101頁
第十一信（LETTER XI）	性格の慣用法（IDIOM OF CHARACTER）	118頁
第十二信（LETTER XII）	学校（SCHOOLS）	33頁
第十三信（LETTER XIII）	読書と思考（READING AND THINKING）	145頁
第十四信（LETTER XIV）	模範（EXAMPLE）	153頁
第十五信（LETTER XV）	富についての意見（OPINION OF WEALTH）	168頁
第十六信（LETTER XVI）	もてなし（HOSPITALITY）	174頁
第十七信（LETTER XVII）	高齢者への敬意（RESPECT TO AGE）	183頁
第十八信（LETTER XVIII）	幸福（HAPPINESS）	191頁
第十九信（LETTER XIX）	逆境（ADVERSITY）	198頁
第二十信（LETTER XX）	子どもを亡くすこと（LOSS OF CHILDREN）	205頁
第二十一信（LETTER XXI）	病気と衰弱（SICKNESS AND DECLINE）	218頁
第二十二信（LETTER XXII）	死（DEATH）	229頁

（総頁数240頁）

Ⅲ.「幸せな母」：『母への手紙』の読者への配慮と修辞法（レトリック）

1.「母の特権」と「母の愛」の非自明性

（1）「母の幸福」のイメージ

あなたは子どもを抱いて座っています。私もそうしています。私は，これほど幸せなことは今までにありませんでした。あなたもそうでしょう。この新しい感情は，魂にやわらかく新鮮な緑の木々を植えたかのようです。心のなかで，期待という木がその枝に豊かな花々を咲かせ，絶えることのない露の滴で輝いていませんか。この純粋で最も美しい愛の泉を味わうことがないとしたら，私たちはなんという損失をもってこの世の中を生きていくことになるでしょうか。(vii)

これが，『母への手紙』の冒頭部分（「序」）である。「母」であるということが，こんなにも幸福であるということ，これを確認することからこの書物は始まるのである。第一信の冒頭も，然りである。

友よ。もしあなたが母になろうとしているのなら，あなたは幸福の絶頂にあるのです。そして，人間という存在の段階のなかで，最も高いところにいるのです。(p.9)

育児や家庭教育に際しての母親向けの助言書に，あえて「母となることの幸福」が記されている，しかもそこから筆がおこされている。ここまで美しい言葉で飾られることはなくても，このような「母の幸福」に慣らされてしまっている者からすれば，何ら不思議のない書き出しであると感じてしまうかもしれない。しかしながら，当時これを読む読者たちにとって，それは当然のことではなかった。なぜならばこの書物では，以下で見るように，「母」であることがいかに女性にとって「特権」的で「有益」であるかということが，「子ども」への影響よりもまず先に，強調されるからである。

（2）「母の特権」とその「有益性」

まず，この書物の構成を一瞥して驚かされることは，第一信と第二信に「母の特権」「子どもの両親への影響」という題名がつけられていることである。第三信以下は，（第五信を除いて，また第十八信以下は少し趣が変わるけれども）おおよそ「母」が課せられるであろう「教育」の内容に通じる題目があげられている。しかし，この第一信と第二信では，まず女性が「母」であるとはどのようなことであり，そのことによって女性はいかなる利益を得ることが出来るのか，ということが滔々と述べられる。すなわち，このような交換条件なくして，女にとって「母」であることは「幸福」であるということを自明的に語ることはできなかったのである。

では，「母」はどのような「特権」をあたえられているというのであろうか。

…天高き志は，キリスト教徒の母を，その「栄光ある聖徒のための市民」を育てている母を激励します。他の全ての望みは副次的であるし，他の全ての栄誉は偶発的であり，儚いものです。彼女が，その使命を神聖なものとすることができるので，天は彼女に特権と力を与えたのです。そして彼女は，自分が変えることを運命づけられている魂の本性を学ぶのであり，天は彼女に，まるで創造主の手から今開花したばかりの花のがくを調べるかのように，その魂をまず最初に念入りに見ることが許されているのです。…

このように，天の英知のもとで女性は，人生の最も美しい季節の魅力を，愛という幸福に捧げ

るように定められているのです。かつて夢中になったふざけた娯楽や自分勝手な楽しみを越えて，母としての威厳にむかって高く昇っていくように励まされ，新しく生まれた愛情によっては，夜も眠れぬ心配事をも乗り越えていくよう元気づけられ，過去の時代の数々の模範例によってその仕事のための力を与えられたのです。それはなによりも，神の声によってその最も神聖な義務への忠誠を厳命されたということなのです。

私たち女性は，自らの天職は，教える（teach）ことであるということを自覚し，優越性においても，力（power）の程度においても，教える能力（faculty of teaching）ということからいっても，神によって分け与えられた領域（department）において，母とは第一のものであると認識しています。優越性においては，彼女は創造主の次席にいます。生徒たちに及ぼす力という点では，競うものがないほど限りないものです。教える能力の点では，変化させる愛という特権を授けられているのです。その光り輝く領域が，新たに生命を与えられた魂とその不死の運命である限り。

母は，自らに与えられたこの高らかな特権を蔑ろにしてはいけません。あるいは，怠惰で楽な生活を要求しようとしたり，自分の個人的な努力はあまり価値がないなどと力なく言ったりしないようにしましょう。…（pp.16～17）（傍点引用者：以下同様）

煌びやかな修飾語に目眩を覚えそうであるが，冷静に分析してみよう。「愛」によって「教える能力」を，女性は生来もっているのか否か。「神の声」によって授けられた「特権」という言い回しは，この問いを解答不可能にする。その上で，その「特権」を行使することによって，「母」の「威厳」や「優越性」，さらに「神」に近づくという「力」の獲得を提示してみせるのである。このような「優越」感や「力」の強調は，読み手の母親たちをおだてて，喜ばせようとしているともいえよう。しかし，女性にとって「母」になることは，女性自身にとっても「有益」なことであるという以下の文章にあるものは，ただ「母」であることの素晴らしさのアピールだけではない。

…特に，幼い子どもの世話をすることは，性格に有益（salutary to the character）なことなのです。それは，優しく慈悲深く神聖なる愛情をおこさせるのです。母たちよ。この仕事（ministry）という神の恵みは，私たちのものなのです。（p.28）

子育てすることがむしろ母親に影響する，子育てによってこそ女性は「優しく慈悲深く神聖なる愛情」を引き出されるのだ，という論法である。そもそもそうした属性が女性に本来備わっているのかどうかという問いが棚上げされているということは，上に見た通りである。しかし，そのことは不問に伏した上で，女性としての「神の恵み」を得，「祝福」され「幸福」になるには「子どもの世話をする」ことが必要なのだということが，あえて，ここで高らかに述べられるのだ。

ここには，明らかに，「子どもの世話」をすることで「幸福」であると感じている女性が当時さほど一般的ではないという前提をみてとることができる。

花のように優美で華やかで若く美しい母がいました。彼女を，その幼子から引き離すものは何もありません。まるで，双子の魂であるかのように。彼女は，かつては社交界を愛していました。人気者であったから。でも，いまや彼女の存在全てを所有する深い愛にとって，泡沫（うたかた）の媚び諂（へつら）い

など何物でしょうか。(p.25)

この『母への手紙』が書かれる約半世紀前にベストセラーとなった娘向けの教訓書では，「社交界」の「レディ」としてのふるまい方が主として論じられていた。男性との接し方，良き結婚相手の見分け方，見つけ方，獲得法などを，その奥義とともに伝授するような書物が，広く受け入れられていた。つまり，上の引用にある女性のように，「社交界」でちやほやされることが女性の美徳とされていたのである[26]。この『母への手紙』には，上の引用にもあるように，そうしたドレスとダンスにうつつを抜かしている娘たちに対する警句が散見される。例えば，第七信の「健康」では，コルセットで身体を締め上げることがいかに「母」となる上で障害となるのか，ということに話題は集中している。

しかし，次節以下でもみるように，ここで「母」に要求されている子育ては，授乳したり，おしめを替えたり，離乳食を与えたり，寝かしつけたり，あるいはそれをどのくらいの間隔と要領で行うべきかといった実際のあれこれではない。後にみるように（Ⅲ章2節（1）の③），確かに授乳については母乳育が望ましいという記述はあるものの，具体的実際的な助言には及んでいない。そうしたことは，乳母なり使用人の仕事であるという感覚が，育児書の書き手にとっても読み手にとっても未だ暗黙の前提としてある。それは，あくまで，実態としてではない。当時の女性たち全てが育児を乳母任せにしていた，ということでも勿論ない。この書物に関わるような人々（これを書いた人，読むことを想定された人々）の意識においては，それがあるべき子育て像，自明の子育て像であったということである。著者が想定した読み手の女性たちにとっては，これが自明の姿であったということができるのである。

この神聖なる最初の何年間かの間，あなたの宝物を，使用人にあまりにも任せきりにしてはいけません。(p.32)

乳母に，子どもをたびたび母の部屋に連れてくるようにさせるのです。(p.40)

母は，使用人などの無教養な人たちの会話に気を付けるべきです。このことについて，母親が注意深くあることに十分すぎることはない，と私は確信しているのです。(p.43)

あくまで「母」は，「愛」をもって精神的影響力を子どもに授けることが仕事なのである。重要なのは，そのことが特別に論じられなければならなかった，ということなのだ。つまり，育児の実際のあれこれはもちろんのこと，「母の愛」ということさえも，自明なことではなかったのである。

（3）「母の愛」についての特論

第五信が独立して立てられていることは，その意味で注目すべきことなのである。

子どもを愛することは，男性にとっては美徳（virtue）です。女性にとっては，本性の要素（element of nature）なのです。それは，女性の本質の特徴（feature of her constitution）であって，全ての民族の幼い子どもの養育を彼女に任せた神の知恵の証しなのです。…子どもを愛することは，若い女性たちの性格（character）のなかでも，最も優美な特徴です。彼女たちは子どもを喜ばせる術を獲得することに夢中で，たいていはそれが自分の立ち居振舞いにいかに魅力を与えているかということに気づきもしません。それは，美の作用を高めるばかりでなく，美が欠けているところでも，強力な効果を生むことも多いのです。(p.48)

「母の愛」は女性の「本質」である，と述べながらも，それは女性の「美」や「魅力」に貢献するのだという条件つきで論じられる。ともすれば，美しく飾られた言葉や感動的なエピソードの繰り返しに隠れがちではあるが，こうした修辞(レトリック)が使われている事実に，「母の愛」をめぐる女性のずれの感覚が表われているのだ。つまり，「母の愛」は自明ではなかったのである[27]。

2.「教育」をめぐる「母」の義務とパラドックス

（1）「母」による「教育」なるもの

「愛」による精神的「影響」。これが「母」による「教育」の全てである。このことが，（2）で述べるようなパラドックスを生むことになる（というよりパラドックスそのものである）のだが，それを見る前に，「母」による「教育」というものがどのように語られているのか，をまず列挙してみることにする。

① 母は教える資格を持つこと

賢人がかつて言い，そして今や世間が信じ始めていることは，教える（teach）ことは，女性の本分（province）であるということです。そしてあなたは，母として，その職業の先頭に立っているのです。私はあなたを祝福しましょう。あなたは常に教えることの出来るライセンスを手にしたのです。教育の大学（College of Institution）で学位を獲得したのです。それによって，あなたの生徒は，あなたという絶え間のない存在のなかで，あなたが意図するしないにかかわらず，またその命令の声が静かであるないにかかわらず，あなたの授業を受け，あなたを模範とするのです。(p.10～11)

②従順さを教えること（臣民をつくること，支配者をつくること）

反抗的なこと（従順でないこと insubordination）は，私たちの国のいくつかの主要な都市で，顕著な特徴になりつつあります。ゆえに，家族のなかで従順であること，上官（magistrates）に対して敬意をもつこと，そして国を愛することは，その心に幼いうちに働きかける人によって，ますます力をいれて教えられなければならないのです。堕落の激流を塞き止めること，そして知識と美徳を力強くもつように見守ることは，母によって，そのゆりかごのなかで眠っている息子を見守りながらなされるべきことなのです。…戦車のなかのボアディケア[28]のようにではなく，全ての支配者への始めの授業は「いかに従わせるか」であると考えたワシントンの母のように。母が，その子どもたちを，正しい政府の良き臣民（good subjects of a just government）にするその努力の度合いが，彼女の愛国心を測る真のものさしとなるのです。(p.15)

あなたの小さな赤ん坊が，決まった傾向や好き嫌いを示すようになる最初の瞬間を見極める（watch）のです。次に出てくる文字は従順さ（obedience）です。…ある訓言があります。それは，理性が弱いところでは，従順さは最も永遠で無条件なものでなければならない，というものです。…強調して言いますが，両親は暗闇に座っている者への光なのです。幼児期の夢のような存在から活動的な子供時代へと移行するとき，両親の権威がとても必要になるときがあります。悪を抑え，幸福を守るために。でも，その時にその準備が出来ているためには，それ以前にそれ〔従順さ；引用者補足，以下同様〕は確立していなければならないのです。(p.35～36)

…幼いうちからの従順さというものは，最も強く強いられなければならないものです。私たちは，ワシントンの例を知っています。…最も賢く他者を支配する事ができる者は，たいてい，彼ら自身の経験から，適切な時期に服従の本質というものを経験しているのです。(p.37)

③子どもの健康管理をすること

経験のある医者は，ある人の人生の本質は，幼い時期の最初の世話〔あるいは授乳〕にかかっているといいます。パリにいる，ある著名な医者は，パリという大都市の混雑した病室でいつも患者にこういうのです。「あなたはお母さんの母乳で育てられましたか」と。お母さんたち，あなたの赤ん坊の身体の状態について学びなさい。もし病気がちであったなら，それが遺伝的なものであろうが偶発的なものであろうが，その治療に最も適した食餌療法でもって接するのです。できる限り薬は使わず，…あなた自身の忍耐と確固とした信念で病気を未然に防ぐのです。(p.30)

④告白させること，全てを見守ること

あなたの子どもが言葉の意味が分かるようになったら，彼がおかした過ちをあなたに自由に話しをさせる習慣をつけなさい。子どもに言って聞かせるのです。その過ちを正して良くすることを，あなたのしつけは目指しているのだということを。もし，子どもの過ちを正すことが出来なかったら，母は自分の義務を放棄していることになるのだということを。そして，医者がその治療のために患者に要求するように，子どもに良く説明するのです。もし過ちをおかしたら，すぐにあなたに話をするようにと。そのように教えられた子どもは，乳母にいって母の部屋によく連れてこさせるようになります。(p.40)

三つの基本的な教え（従順，親切，真実）を母が教えれば，他のものは自然に彼らの中に織り込まれ，幼い子どもの道徳的な規範意識のなかで，重要性を主張するようになるのです。将来の美徳の体系の基礎を据えている間，母の不寝番の目は，それを見逃さないでしょう。(p.43)

⑤子どもの性格（個性）にあわせた教育をすること

母によってなされる教育システムのひとつの強調すべき利点は，その対象〔子ども〕の異なった傾向（性格）に合わせることができることです。学校においては，これはほとんど不可能です。(p.118)

⑥考える術を教えること

私たちは，彼らに考える術を教えるべきなのです。…子どものうちは，その心はいかに考えるのかを教える敬虔な母からの刺激や色づけを受け取るものだというのは神の言葉なのです。母は早くに解任されるにもかかわらず，彼（子ども）は，彼女の教えから文学への愛や独自で独立した探究への趣向を吸収したのです。(p.150)

「愛」によってつくられた心の中の「母」の「権威」，すなわち「規範」に「従順」である人間，つまりは，「自己統治する人間」を作り出す，という「愛による教育」[29]は，このような仕組みで可能であるかのようにみえる。しかしながら，先でみたように，「母の愛」が自明ではないところで，その仕組みは不完全なものでしかない。さらに，「愛」による精神的「影響」が「母」による「教育」の全

てであることによって，この「愛による教育」は，以下のようなパラドックスを孕むのである。

（2）「息子」と「娘」の「教育」をめぐる「母」の循環論法

ここで，本節（1）の冒頭の引用を再度参照されたい。そこでは，女性は「母」となるだけで「教育」の資格を与えられた，と「祝福」されている。それどころか，以下でみるように，女性は，男性よりも，この仕事に適しているといわれるのである。

〔この国の〕男性たちは皆，相変わらず物欲や名誉欲によって翻弄されています。そうした競争は，あらゆる階層の人々を刺激します。ほとんど休みなく，安息日もとらずにあくせく働き，外国人のなかには，私たちの国は大きな労役所のようだという人もいます。…そうした，富や力を求める男たちが，無知な子どもたちを教えるという骨折り仕事のために身をかがめることをするでしょうか。…彼らは，この数え切れないほどたくさんの細やかなことに精通するようになるまで，長い時間を絶えることが出来るでしょうか。…ここは，女性の忍耐と静寂のための場所なのです。そこに女性は入り，現世が決して与えることのない報いを勝ち取るのです。（p.143）

資本主義の論理によって，人が動かされ始めている時代である。女性は，その論理に惑わされずに生きていくことができる点で男性に勝るという。こうした言い回しは，この時代の女性著作家たちによってかなり多く用いられた[30]。そうした意味で「母」という仕事は，なかでも最も，女性に相応しいものであることが，ここで強調されている。「子どもを教える」ということは，直接利潤を目的としない，「身をかがめる」ような「忍耐」であり，だからこそ，女性はそれをなすことによって天に報われる，というのである。

ところで，先の引用（本節の（1）の冒頭①）には，「世間が信じ始めている」（傍点引用者）という言い回しがなされている。つまり，未だこのような考え方はさほど周知のことではないのである。にもかかわらず，「あなたが意図するしないにかかわらず…」，あなたの生徒は「あなたの授業を受け，あなたを模範とする」のだという。これは，いわば脅迫めいた宣告のようなものである。著者は，そうした危惧や不安を和らげるべく，次のような励ましの言葉を用意する。

…「私にはそんな資格はありません」というような，慎ましいお母さんがいると思います。でも，深い学識は必要ないのです。それにもしそうであったとしても，いったい誰が，母よりも，その子どもたちのために知識を得ようという強い動機を持つでしょうか。読むこと，正しく書くこと，言葉を定義すること，書き方，算数，簡潔な書簡体や描写法で思考を表現すること，などを母は確実に教えることが出来るのです。これらは，完全な教育には欠くべからざる基礎教育だから，どんなに習っても完璧すぎることはありません。母の忍耐力と愛情は，彼女を，継続的な反復と練習を必要とするこれらの分野の女教師とすることに大いに力をかしていると私は思います。…（p.104～105）

「愛」によって「精神的な影響」を与えることが，「母」の「教育」の全てであるとしながらも，やはり「母」も教えるべき「何か」を知識として知っておかなければならない。「母は〔知識そのものではなく〕考える術を教える」（p.150，本章2節（1）項⑥）という言い方は，こうしたパラドックスを修復すべくなされたかのようである。しかし，それでもなにかを心得ておく必要があると著者が

考えていることは，上の引用からも明らかである。「(教える) 適性」をもった「母」も，「知識を得」ることが要求されるのだ。「深い学識は必要ない」という言葉が，いとも＜自然＞に書かれてしまうこと自体は問題である。しかし，「深」くはなくとも「基礎」的な「知識を得る」ことは，「子どもたちのために」なされることであり，それは誰よりも「母」が率先して行うものだということが，ここでの強調点なのだ。

18世紀に流行した「レディ」のための助言書において「知的教育」が軽視されていたという事実はない。確かに「知識をひけらかすな」という助言はあったが，同じことは男性にむけても言われており，また「レディ」の嗜みとして「知的趣向」は欠かせないものであった[31]。その名残りは，次の引用にも現われているように，この『母への手紙』にも垣間見える。ゆえに，ここでは「母」が身につけるべき「知識」が「深い」か否かが問題ではなく，それが何のためになされるのか，に注目するべきなのである。

> 洗練された心の男性は，良き家事の価値に感謝することはするけれども，たいていは知的な趣向をもった女性をより賞賛します。彼ら自身がもつ知識が多ければ多いほど，無知な伴侶を尊敬することは困難なのです。(p.156)

『母への手紙』のメインテーマは，良き「母」であるために「知識を得る」ことを勧める言説である。振り返ってみれば，本節冒頭で明らかにしたように，この『母への手紙』は，まずは「母」となるということ，「母」となって子どもに「愛」をもって接することが，女性にとってどんなに「特権」的なことであるのかを力説するところから始まっているのだ。母は子どもを愛するという命題自体も，子どもからの影響であるとか，そのことが女性としての魅力を増すからであるとか，付帯条件がなければ覚束ないことは，既に見てきた通りである。その上，「子どものため」の学習を要求するのである。当然のことながら，より強力な条件（説得の論理）が示されなければならなくなる。しかし著者は次のような言説をもって，この難題をすりぬける。すなわち，このような「母」予備軍をつくること自体が，「母」の仕事であるという論理である。「娘」たちを良き「母」に育てることが，まず私たち「母」の義務なのだ，というわけである。

> 「良き母とは，自らの活動の特別な場であるかのように，子どもの心をつかむものです。これができるようになるということが，女子教育の最大の目的なのです。…」(p.12)

このような論法，つまりは堂々巡りの循環論法であるが，それがいたるところでつかわれるのである。この循環論法は意図的なものではないかもしれない。確かなのは，「母」の仕事のあれこれを具体的に細かく助言する場面で，「母」はこうでなければならない，ゆえに「母」となるはずの「娘」にそれを教えること，これが「母」の務めであるという言い回しが繰り返されるということである[32]。

第六信「習慣」では，「母」とはそもそも「利己的ではないものだ」といいながら，「娘」に「共感」を育てることを強調する。先にも触れたが，第七信「健康」では，「夫の関心や，子どもの幸福や，家庭の快適さ」というものがいかに「母」の健康にかかっているかということを力説しつつ，その助言の主たる話題は「健康な母」になるための「娘」たちへの注意（コルセットの弊害について）である。第二十一信「病気と衰弱」についても同じような話が繰り返される。第八信「経済」や第九信「家庭

教育」は，家事よりも育児を優先させて，その上でいかに上手にやりくりできるかということに話題は集中し，あるいは第十六信「もてなし」や第十七信「老人への敬意」などでも同じように，あるべき「母」の姿をあたかも女性の本来的姿のように描きながら，一方で「娘」たちをそのような「母」に仕立て上げること自体が「母」の仕事である，と説得する。第十四信「模範」は，ずばり「母自身が「娘」たちに良き主婦の模範を示すべき」というのが主題である。

次に引用する「長女」の教育に際する助言には，この堂々巡りの輪環の止め具（つじつま合わせ）を垣間みることができよう。

> 特に長女の位置は高いのです。彼女は最初に母の愛を受け取ります。彼女はいつも母の側で語らうことを楽しみます。しかしまた，母がいないときは彼女が自然な総督なのです。母は，彼女に正しい模範を形成する際に二重の痛みを受けなければなりません。彼女自身を，愛らしく勤勉で家庭的にしなければならない上に，これらの美徳が，妹たちのまだ柔らかく透明な心に印象を残すものだということを信じさせなければならないからです。彼女は，母の導きの場所を満たすべく神に召命されているのですから。(p.60)

「長女」とは，「母」の「愛」が最も強く向かうべきところであると同時に，それをまずもって身につけなければならない存在なのである。

このように，『母への手紙』が「娘」教育論に傾斜したものであることは明らかであるとしても，「息子」の教育についてはいかなる言説がなされているのだろうか。当然のことながら，全く書かれていないわけではない。それどころか，本章Ⅲの1節や2節の（1）で紹介したような「母」の偉大さを強調する箇所や，「母」の仕事の意義を述べ立てているところでは，ともすれば「赤ん坊」を「彼」という男性代名詞で受けたり，あるいは「ワシントン」や「グラックス兄弟」などのような有名な男性の政治家，君主たちを育てたのが，その「母」である，といった言い方が多くなされる（p.11など)。本節（1）の②の引用でも，「良き臣民」になるべくして育てられている「ゆりかごのなかで眠っている」赤ん坊は，「息子」である。次の引用で明言されているように，女性の愛国心は，「息子」に対する「母教師（maternal teacher）の義務」(p.14）によって，はかられるものなのだ。独立革命期に成立し，この南北戦争前の時期の女性観を用意したとされる「共和国の母」の観念[33]とは，まさにこのイメージである。

> 子どもたちを正しい政府の良き臣民（good subjects of a just government）にさせる準備をする，この仕事に母としていかに勤勉であるか，この度合いが彼女の愛国心の真のものさしとなるのです。(p.15)

つまり，「母」はいかに「息子」を育てるかということ自体にその存在理由があるといってもいい，ということになろう。実際の教育への助言では，次のような無理が生じるにもかかわらず。

> 息子のしつけでは，母は天から授かった知恵の分け前を二倍必要とします。彼らには，その性に適した行動の領分を示しなさい。…娘のためにはできることは多くあるが，息子は母親の支配能力を超えているといった意見には賛同しないように気を付けなければなりません。これは間違った意見です。彼らに関して言えば，「鉄は熱いうちに打て」という指令を倍の力でもって実行す

るべきです。(p.121～123)

「社会の仕組みによって，姉妹たちより早くに家庭の影響力から脱出しなければならない」(p.122)ような「息子」たちには，「娘」たちより早いうちにその心の中に「母」の影響力を植え付けておくことが必要である，というのである。そうしておけば後々家庭を離れ，「母」の力が及ばないところに行っても，大丈夫だという論法である。そして，堕落した人生を送りながらも最後は「幼少期の母の教えのおかげで」立ち直った男性たちの逸話が，次々と披露される。つまり，早いうちに「母」の力を植えつけておけば，そして苦難の時代を耐え抜けば，いつのことになるかわからないがその果実はきっと得られるということである。

しかし，そのような成功話をいくつも提示し，「息子」の教育の重要性とそれによる「母の特権」を繰り返し述べながら，最後はそうしたことができる「母」をつくること，つまり「娘」の教育の重要性を再確認する，この循環論法の語調は，それぞれ（「息子」と「娘」）の教育の重要性が高ければ高いほど，強められるのである。

3．「母」役割をめぐる不安・不満から快楽への転化：共感の提示と欲望の喚起

このように言うお母さんがいます。「もし私たちが，子どもたちのために要求されること全てをするとしたら，私たちは自分のためのことをする時間が全くなくなってしまいます。私たちが，精神的に向上できるような全ての希望をあきらめなければならないのは確実です。私たちは知的な趣味を楽しんだり，当世の文学についての知識を維持することなどはできないのです」，と。

私はここまで，母とは子どもの教育に参加し，彼らと共に進歩する必要があると主張してきました。しかし母はまた，こうした副次的な向上よりも大きな財産を得ることができるのです。正しい教育（management）システムによって，母は時代の標準に遅れてしまうことを避けられるのです。

この教育のシステムについて，母は，単純な家事の理論よりもよく理解しておかなければならないのです。(p.153)

家事に関することが自分の時間を奪ってしまっていると不満を思っている人も，…いろいろ工夫するところが残っているのです。(p.156)

子どもと向かい合ってその世話と教育にのみ喜びをみいだしているうちに，自分の時間がなくなり，時代に遅れてしまう，取り残されてしまう，といった不安，寂寞感がはっきりと言及されている。つまり，そうした意識，感覚が当時の母たちをとらえていたことは確かである。この不安は，「不満」とも表現されながら，そうはいってもいろいろ工夫する余地があるとして，なだめられ，励ます言説によって覆い隠されていく。この論法は，先で触れた「深い学識」の必要性云々を述べた箇所でも同じように現われていた。

高らかに「母」たることをうたいあげる言説群の合間に，このような「母」であることへの不安や不平不満への言及がところどころ姿を見せる。そしてそれは，上の引用のように，ひとつひとつ丁寧に美しい言葉によって覆われていくのである。陰画のように，逆写しでこの『母への手紙』を眺めてみると，Ⅲ章１節で整理したような「母の特権」や「母の幸福」は，こうした不安感や孤独感を打ち

消し，自信を与えるために強調されているかのように読むことができる。

第十六信以降，特に第十八信「幸福」や第二十一信「病気と衰弱」などの言説には，美しい言い回しの端々に，悲痛な思いとともに，女性の高らかな自己意識の鼓舞，欲望の喚起が演出される。

私たち女性の本性と定められた仕事とを調和させることは，女性特有の優雅さのみならず，その運命を完全に遂行するために必要な優雅さでもあります。妻や母として，女性は他者の幸福を守るのです。もし自分自身の幸福を守ることが出来なかったら，そのような高い信頼を受けるに値するでしょうか。女性は周りの者を快くするように期待されているのです。しかし，もし自身の性格がバランス良くしっかりとしていなかったら，どのようにしてこれができるでしょうか。…女性は，雲のなかの太陽の光，人生の嵐のなかでの希望の虹のようであることを期待されているのです。だから，自分自身の幸福の土台は，暗黒や嵐の及ばぬところにおかなければならないのです。(pp.191～192)

「女性は雲のなかの太陽であるべき」という言葉には，見覚えがある。これは，著者リディアに向かって，夫がその精力的な活躍を嫌って放った言葉である（Ⅱ章２節参照)。著者は，夫の自分への非難の言葉さえも時流にのせてしまうしたたかさをも持ち合わせていた。

病んでいる人の世話は，時間と注意が捧げられるべき科学なのです。それは，私たち女性の仕事のひとつです。私たちは，〔身体が弱くて〕いろいろな軽い病気をするように定められているから，他者の「病気に触れる」ことがよりたやすくできるのです。(p.221)

自分の姿をみせず陰に隠れて，他者の幸福を守ること。この仕事に徹することによって「特権」を得，他者を支配する。その力は，その他者が弱き者（病んでいる人，貧しき人，そして幼き者）であればあるほど大きなものなる。女性は，自らが弱き者であるという「女らしさ」を否定することなく，しかもだからこそこの仕事に適しているというのである。女性は，この天職に献身することで，不安や孤独感，葛藤を打ち消すことができるであろう。ここにあるのは，他者には見えず，しかも他者が生きていく上でなくてはならない存在となり，支配者となるという欲望である。顧れば，この書物の冒頭は，「母」となるということは「優越性」と「力」と「特権」を手にすることであるということから始まっていた。Ⅲ章１節（２）のはじめの引用を，部分的に確認してみよう。

私たち女性は，自らの天職は，教える（teach）ことであるということを自覚し，優越性においても，力（power）の程度においても，教える能力（faculty of teaching）ということからいっても，神によって分け与えられた領域（department）において，母とは第一のものであると認識しています。…

母は，自らに与えられたこの高らかな特権を蔑ろにしてはいけません。あるいは，怠惰で楽な生活を要求しようとしたり，自分の個人的な努力はあまり価値がないなどと力なく言ったりしないようにしましょう。…(pp.16～17)

これらの言説は，権力を手にする快楽と欲望を限りなくかきたてるメッセージであることはいうまでもない。つまり『母への手紙』の言説は，当時の女性たちのためらいや拒否感，不安や不平不満などに言及し，共感することによって，それについては心得ていることを提示しつつ，美しい修辞（レトリック）によっ

て「母」という仕事に献身することを勧告し，権力への欲望を喚起するのである。その論法は粗雑であるともいえる。しかしこの言説は，書物を「読み」,「書き」，自らの主体性を主張し，自らの意見を表現する意欲的な女性自らが納得し，そうした女性たち（意識や階層のずれはあるとしても）を説得するべくしてかかれたものである。その意欲を，姿の見えない支配者になるという欲望に転化する巧妙なしかけ（修辞（レトリック））が，多くの女性たちの心をとらえ，よく読まれ，版が重ねられたのである。

Ⅳ. おわりに

『母への手紙』が多くの女性を魅了した19世紀前半期のアメリカでは，男女問わず,「家庭（教育）」「子育て」「父母の役割」などについての言説を，活字メディアの勃興という大衆文化の時流にのせて，書物や雑誌などに数多く流出しつづけていた。ただ，男性によって書かれたものは（18世紀以前には殆どの助言者が男性によって書かれていたが），当時の氾濫現象の主流ではなかった。本稿で分析した『母への手紙』に代表されるような，女性によって女性向けに書かれた言説が大きな市場を獲得していた[34]。女性が，自ら＜母＞としての自己像を表現しはじめ，それを女性自らが競って受容するようになったのである。しかしながら，彼女たちが書いた＜母＞は，結果として男性によって表現され（てき）たイメージを再現してしまうことに陥る。にもかかわらず，そこにいかにして自らの表現を見出していったのか。それが男性ディスコースとの対決の過程であった。

『母への手紙』の言説には，その対決，あるいは「サーバイバル」の軌跡が如実に現われている。その言説において,「社交界」での「レディ」の嗜みが未だ女性にとっての関心事（理想的女性像）であり，乳幼児の世話は「乳母」がするのが暗黙の前提であり，つまりは「母の愛」や「母」であることの「幸福」が未だ一般的ではないことは明らかである。そして，良き「母」とならなければならないという事態に対してためらいや不安，拒否感をもつ女性がいることにも，当然であるかのように言及し，共感を示すのである。そうした読み手の女性たちへの理解を提示して，安心感を与えつつ，慎ましい女性であるという「女らしさ」の規範を超えずに自らの存在の価値を主張したいという彼女たちの欲望を喚起しながら,「母の帝国」[35]の支配者となることに向かってそれを転化していく。

当時同じように＜母＞役割を礼讃した男性の言説には，こうした修辞（レトリック），換言すれば読み手の女性たちへの配慮をみてとることはできない。女性とはそもそも＜母＞に相応しい存在であることが，前提とされている[36]。これをもって，ゆえに男性によるものは，女性によって書かれたものより受容されなかったのだ，という断定はいささか性急であるとしても，少なくとも女性たちは，こうした修辞（レトリック）を自らの表現に埋め込んだのであり，女性たちも喜んでそれを読んだのである。

この後，まさにこうした修辞（レトリック）によって「家庭」像を飾り一世を風靡した『アンクルトムの小屋』[37]が「引き起こした」とかのリンカーン大統領に言わしめた南北戦争を境に，急速にこのような＜母＞礼讃言説は消滅していく。変わって，育児に関する書物は＜母＞がなすべき＜育児＞や＜教育＞に対する具体的実際的（「科学」的）アドバイスに終始するようになるのである。＜母の愛＞や＜母の幸せ＞は，女性にとっても自明のこととなり，それについてあえて書いたり，それを説得するために様々な交換条件や美しい語句を提示することは不必要となる。

その後（南北戦争後）のことについては更に検討を要することはもちろんである。しかし，ここで明らかにされたことは，19世紀前半期アメリカという特殊な時代，地域の状況のみの問題ではない。当時の文化的状況は，制度としても大衆文化としても近代日本に大きな影響を及ぼしたのである[38]。現代の私たちが，＜教育＞として自らの時代の鏡に映している像もまた，このような修辞（レトリック）の上に成立している。その修辞（レトリック）が不要であるほど＜母の愛＞に対して自明性を感じてしまうとするならば，＜教育＞なるものが孕む不透明性に気づくこともないままに，その矛盾を再生産しつづけていくことになるのである。

注

（1） 江原由美子「制度としての母性」『日本のフェミニズム⑤　母性』岩波書店，1995年； 水田宗子「＜母と娘＞をめぐるフェミニズムの現在」同編『母と娘のフェミニズム ― 近代家族を超えて ―』田畑書店，1996年； A-M・ド・ヴィレーヌ編『フェミニズムから見た母性』勁草書房，1995年（原書1986年の抄訳）など。

（2） このような研究はおそらく枚挙にいとまがないと思われるが，例えば本稿が対象とするアメリカの家族史研究としては，Deglar, C.N., *At Odds: Women and the Family in America from the Revolution to the Present*, 1980が代表的である。その契機となった研究が，アリエス『＜子供＞の誕生 ― アンシャン・レジーム期の子供と家族生活 ―』みすず書房，1980年（Ariès,P., *L' Enfantet la Vie Familiale sous l' Ancien Régime*, 1960）。

（3） ジャック・ドンズロ『家族に介入する社会 ― 近代家族と国家の管理装置 ―』新曜社，1991年（Donzelot, J., *La Police des Familles*, 1977）。

（4） 表象，イメージされたものを，総じて＜　＞で括ることにする。ただし，なかでも『母への手紙』や伝記類，あるいは先行研究などの書物からの引用語句は，特に「　」で括るものとする。

（5） フーコー『性の歴史Ⅰ　知への意志』新潮社，1986年（Foucault, M., *La Volonté de Savoir, vol.1 de Histoire de la Sexualité 1976*），フーコーほか『自己のテクノロジー』岩波書店，*1990*年（*Technologies of The Self: A seminar with Michel Foucault*, 1988）。

（6） 本稿に関わる19世紀アメリカに関しては，森田尚人「アメリカにおける家族の構造変化と子ども観・女性観の転回」村田泰彦編『生活課題と教育』光生館，1984年； 田中智志「愛による教育の存立 ― 自己準拠する身体・家庭 ―」『駒沢大学文学部研究紀要』第54号，1996年，等がある。

（7） 「フェミニズム批評のひとつの論点である，表現に性差はあるのかという問いは，表現という行為における性差の問題と，表現されたテキストのなかでメタフォアとして機能する性差の問題とを区別して考えられるべきである。テキストにおけるメタフォア化された性差は，テキストの再生産を決定的に支配する。」（水田宗子『物語と反物語の風景 ― 文学と女性の想像力 ―』田畑書店，1993年），31頁。

（8） 水田宗子『フェミニズムの彼方 ― 女性表現の深層 ―』講談社，1991年，「まえがき」より。

(9)　水田宗子『物語と反物語の風景』(前掲書, 1993年), 18頁。

(10)　英米文学における,「母なるもの」をめぐる「女性の主体の破綻」については, 外岡尚美「母なるものの幻想—『夜への長い旅路』における母と子の肖像」久守和子他編著『英米文学にみる家族像—関係の幻想—』ミネルヴァ書房, 1997年。

(11)　Ryan, Mary P., *The Empire of the Mother : American Writing about Domesticity, 1830-1860*, 1982

(12)　Blumin, S.M., *The Emergence of the Middle Class: Social Experience in the American City, 1760-1900*, 1989

(13)　19世紀前半期（アンテベラム期）アメリカの<母>と<子>の問題についてのレヴューとして, 日野淑子（拙稿）「アメリカ母子関係史の課題—アンテベラム期に関する諸論を手がかりに—」『東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室紀要』第20号, 1994年。
「愛による教育」については, 特に, ブロッドヘッド「鞭を惜しむこと—南北戦争前のアメリカにおける教育と小説—」『現代思想』vol.20-10, 1992年10月（Brodhead, R. H., "Sparing the Rod: Discipline and Ficton in Antebellum America", Representations 21, 1988, or Brodhead, R. H.,*Cultures of Letters: Scenes of Reading and Writing in Nineteenth-Century America*, 1993）および, 田中智志, 前掲論文。

(14)　筆者は, いくつかの家庭教育書・育児書の分析によって, 書き手の性差による言説上の差異に注目し, このような仮説をたて, ケーススタディによって論証を進めているところである。
日野淑子（拙稿）「リディア・マリア・チャイルドにおける娘の教育と<母>—アンテベラム期アメリカの家庭教育書・育児書をめぐる一考察—」『東京大学教育学部紀要』第34巻, 1994年
野々村淑子（拙稿）「南北戦争前ニューイングランドにおける家庭教育書・育児書の氾濫と<母>の主題化」『大人と子供の関係史　第2論集』大人と子供の関係史研究会, 1996年
同「19世紀アメリカの家庭教育書と男女の領分—S.G.グッドリッチ『炉辺の教育』(1838) に描かれた子どもへのまなざし—」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』第43集, 1998年

(15)　佐藤宏子『アメリカの家庭小説—十九世紀の女性作家たち—』研究社出版, 1987年, 12頁。この研究書ではシガニーは扱われていないが, 扱わないことについて「はじめに」において断りの文章が入れられるほど, 著名な人物である。自ら自伝を認め（*Letters of Life*, 1866), 今世紀に入って伝記も出版されている（Haight, Gordon S., *Mrs. Sigourney, The Sweet Singer of Hartford*, 1930)。

(16)　1830年には, 20誌以上に寄稿していた。ある雑誌は, 3, 4編（20頁ほど）の詩に100ドル払った（当時の相場は, 1頁2ドル, 詩の1編に5ドルなので, 通常であったら20ドルといったところ)。また, 当時の女性雑誌のうち最も有名な *Godey's Lady's Book* の編集長である Godey は, シガニーの名を編集者の一人として使うことだけで, 年に500ドル支払った。(Haight, Gordon S., *op.cit.*, pp.36～37)

(17)　Haight, Gordon S., *op.cit.*

(18) Douglas, A, W., "Mrs. Sigourney and the Sensibility of the Inner Space", *The New England Quarterly*, June 1972, p.166

(19) Haight, Gordon S., *op.cit.*, pp.15～19

(20) *Ibid.*

(21) *Ibid.*, p.167

(22) Haight, Gordon S., *op.cit.*, p.101

(23) Hardyment, Christina, *Perfect parents: Baby-care advice past and present*, 1995 (Original edition first published as *Dream Babies*, 1983), p.41
アメリカ議会図書館のカタログによれば，1838, 39, 40, 46, 48, 54年に再版されている。
(*The Union Catalogue Pre-1956*, Mansell, 1975)
拙稿「南北戦争前の…＜母＞の主題化」（前掲論文，1996年，注14）も参照。

(24) 当時の育児書・家庭教育書の研究史については，拙稿「アメリカ母子関係史…」（前掲論文，1994年，注13）を参照。

(25) Haight の伝記には，「彼女の名前だけで売れた」本のひとつとしてあげられているのみである（Haight, Gordon S., *op.cit*, p.130)。人名録や，自身の伝記においては，タイトルさえ挙げられていない（*Dictionary of American Biography*, edited by Allen Johnson, New York, 1928; *Dictionary of Literary Biography vol.3, Antebellum Writers in New York and the South*, edited by Joel Myerson, 1979; *Letters of Life*,1866)。

(26) 野々村淑子（拙稿）「18世紀アメリカにおける娘の教育についての一考察―Dr. ジョン・グレゴリー『父から娘たちに贈ることば』（1774）を素材として―」『日本の教育史学』第39集，1996年

(27) 18世紀以前は，母役割は女性像のなかで重きを占めてはおらず，授乳や出産の助言のなかでも，神への義務や母子の健康への言及はあったが，母と子の感情的絆，愛情などはほとんど重要視されていなかった，つまり，「母の愛」は，女性のあるべき姿においても子育ての場面でも自明なものではなかったとする研究がある（Bloch, R.H., 'American Feminine Ideals in Transition: The Rise of the Moral Mother, 1785-1815', *Feminist Studies 4*, 1978)。本稿は，この図式を全面的に前提とするものではなく，18世紀以前の言説（子育てに関わる助言書や女性向けのコンダクトブックなど）の系譜については，改めて検討を要すると考えている（拙稿「人生における良きふるまいについての助言書の歴史にみる教育と性差：序―ニュートンによるアメリカの文献目録・研究案内を手がかりに―」『東京大学大学院教育学研究科教育学研究室紀要』第22号，1996年)。しかし，本稿の『母への手紙』の言説分析から明らかになったことは，限定的ながら，この図式に沿う意識（感覚）が，19世紀初頭の女性によって表現されたということである。

(28) Boadicea　ローマ人支配に反旗を翻し惨敗した Iceni の王妃（？～62)

(29) 注13を参照のこと。

(30) Welter, B., "The Cult of True Womanhood: 1820-1860", *American Quarterly*, Summer,

1966

(31)　拙稿「18世紀アメリカにおける娘の教育について…」(前掲論文, 1996年, 注26) 参照。

(32)　『母への手紙』と同様, この時期の家庭教育書・育児書の代表的作品とされるリディア・マリア・チャイルドによる『母の本』も, 娘教育論を主題としている。拙稿「リディア・マリア…」1994年 (前掲論文, 注14) 参照。

(33)　Kerber, L., *Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America*, 1980; Norton, M.B., *Liberty's Daughters: The Revolutionary Experience of American Women, 1750-1800*, 1980

(34)　拙稿「南北戦争前…<母>の主題化」(前掲, 注14) を参照。当時の大衆文化の「女性化」については, Douglas, A., *The Feminization of American Culture*, 1977 に詳しい。

(35)　Ryan, Mary P., *op.cit.*, 1982

(36)　注14を参照。

(37)　Stowe, H.B., *Uncle Tom's Cabin: or, Life Among the Lowly*, 1852
1862年, ホワイトハウスに招かれたストウ夫人に, リンカーン大統領が「あなたが, この大きな戦争を引き起こした作品を書いたご婦人ですね」と述べたことは有名な話である (Ryan, Mary P., *op.cit.*, p.147, 1982, など)。

(38)　小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師―来日の背景とその影響―』東京大学出版会, 1992年。本書については, 拙著による書評を参照されたい (『歴史評論』№529, 歴史科学協議会, 1994年5月号)。また, 高橋裕子「「ヴィクトリア時代の家庭(ヴィクトリアン・ホーム)」と最初の女子留学生―津田梅子のランマン家受入れの経緯を中心に―」『津田塾大学紀要』第30号, 1998年, など。

A Woman's Discourse on "Mother" and "Education" in Antebellum America — Lydia Huntley Sigourney, *Letters to Mothers*, 1834 —

Toshiko Nonomura

How women have represented <mother> ? This problem has been discussed in history of modern society, family, and education as well as in feminism critique. The recent social studies say modern family is the central and useful apparatus for educating modern men. <Mother> is the main existence in modern family with <child>. Women voluntarily make themselves be good <mother>, they say. The mechanism of women's self-formation to <mother> must be clarified.

This paper is a case study of the theme. In Antebellum (before Civil War) America, many middle class women began reading and writing. And many books and magazines were published for women. *Letters to Mothers*, written by Lydia Huntley Sigourney, is one of them. Sigourney, famous as "Sweet Singer of Hartford", wrote enormous sentimental poems and stories, created "the happy mother and home", and showed the model to readers.

In *Letters to Mothers*, "mother" is very "happy" and has "privileges". For "mother" has "precedence", "power", and "faculty of teaching" through "love". But the "privileges" or "usefulness" is showed the first with alternative interest, as contribution to women's beauty or character, and etc. "Mother's love" is not obvious in this book. Women's uneasiness, complaint, or impatience in "mother's" duty are sympathized, and soothed. And though "mother" is thought be important to educate "son" to be "good subject of a just government" (the image of "Republican Mother"), the first role of "mother" is said to educate "daughter" to be suitable to "mother". This paradox appears here and there. "Privilege" of "mother" is the rhetoric of transformation women's uneasiness to strong desire to be a empress of "the Empire of the Mother" (Ryan, M. P.).

The way of discipline prevalent in Antebellum America is called "Disciplinary intimacy" (Brodhead, R. H.). It is explained as "enmeshing the child in strong bonds of love is the way authority introduces its change to its imperatives and norms". *Letters to Mothers* is said "(it) captures to perfection this plan's scheme of nurture and this nurture's intended goal". But we can not say so through detail analysis showed before.

This woman's discourse is full of beautiful and ardent rhetoric of covering the sense of unfitness to "happy mother" of women readers. This anxiety about women readers is not appeared in men's discourse. Women's discourses to women readers, popular in this epoch, may be popular for this rhetoric. At least we can say *Letters to Mothers* is not consisted without this rhetoric.